

高等学校における教科指導の充実

地 理 歴 史 科

歴史的事象を多面的・多角的に
考察させる日本史の授業

栃木県総合教育センター

平成18年3月

ま え が き

栃木県では、平成13年度に「とちぎ教育振興ビジョン」を策定し、新しい時代への展望に立った教育計画に基づいて、様々な教育施策を推進してきました。その基本理念は「とちぎ教育振興ビジョン(二期計画)」においても引き継がれ、事業を展開するにあたっての視点の一つとして「学ぶ力をはぐくむ教育の充実」が盛り込まれています。

また、学力に関する国際的な調査や教育課程実施状況調査によって、生徒の学力の状況や学習に対する意識などが明らかにされてきました。これらの調査の報告書においても、学力向上のための提言がなされています。

これらのことから、総合教育センターでは、「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」事業を新たに起こしました。この調査研究の目的は、基礎・基本の確実な定着を図るための授業改善を目指して、教科指導の在り方について研究し、その成果を普及することにより、学力の向上に資することにあります。今年度は、国語科、地理歴史科、数学科、外国語科(英語)の4教科において、教育課程実施状況調査等の調査結果から指摘されている課題を踏まえ、その解決を図るための授業改善の方策等について研究に取り組みました。研究の成果をまとめた本冊子を、各学校の実情に応じて有効にご活用いただければ幸いです。

最後に、今年度の調査研究を進めるにあたり、ご協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成18年3月

栃木県総合教育センター所長
佐藤 信勝

目 次

はじめに	1
事例1 政治の中心地の移動を題材とし、歴史的事象を考察させる指導と評価の工夫	2
事例2 異なる立場・時代の史料を比較して歴史的事象を考察させる指導と評価の工夫	13
おわりに	23

歴史的事象を多面的・多角的に考察させる日本史の授業

はじめに

地理歴史科では、平成15年度高等学校教育課程実施状況調査等の結果から指摘されている課題を踏まえ、日本史の指導の在り方について研究に取り組んだ。

日本史の指導については、従来から、「知識・理解」に偏っているとの批判があり、多くの生徒が「日本史は暗記科目」と捉える傾向がある。確かに、「知識・理解」は歴史学習には不可欠であるが、これだけにとどまらず、「資料活用の技能・表現」と「思考・判断」の能力も含めた歴史的思考力の育成が求められている。

また、国立教育政策研究所の「平成15年度高等学校教育課程実施状況調査報告書の概要」は、日本史Bの学習状況については、「資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察したり、複数の資料の共通点や相違点を考察したりする力が十分には身に付いていない状況がみられた。」などと分析している。

これらのことを踏まえ、本研究では、歴史的思考力のうち、歴史の分析と解釈(多面的視野・考察、異なる資料や見解の比較・対照)を中心とした能力の育成を目指し、歴史資料を積極的に活用して、歴史的事象を多面的・多角的に考察させる指導を実践した。

その際、教科書レベルの知識を前提とし、資料の読み解きや複数の資料の比較などを取り入れて、因果関係や当事者の主張について追究させた。その結果として、歴史への興味・関心が高まるとともに、歴史的事象の理解が深まり、主体的に学習する態度が形成されることを期待した。

各事例の実践内容は次の通りである。

事例1 政治の中心地の移動を題材とし、歴史的事象を考察させる指導と評価の工夫

平城京遷都、平安京遷都、鎌倉幕府開設を題材とし、遷都の要因について反復的に考察させることにより、歴史的事象を多面的・多角的に考察し判断する力の育成を目指した。

事例2 異なる立場・時代の史料を比較して歴史的事象を考察させる指導と評価の工夫

承久の乱について、異なる立場から記された4つの史料を用い、それぞれの史料の見解を比較・対照しながら追究させることにより、歴史的事象を多様な視点から考察する力の育成を目指した。

<研究協力委員>

栃木県立上三川高等学校	教諭	山本訓志
栃木県立小山城南高等学校	教諭	津布樂一樹
栃木県立矢板東高等学校	教諭	山形正樹

<研究委員>

栃木県総合教育センター研修部	副主幹	杉山正明
----------------	-----	------